芥川竜之介

――菊池寛との比較において――

石川承紀

芥川竜之介については、吉田精一氏はじめ多くの人々が研究しています。しかし、同時代の人々と比較することは、まだ十分には、なされていません。そこで、芥川と共に、大正文学を制覇した、菊池寛を比較の対照とし芥川像を、鮮明にしたいと思います。

(一) 芥川、菊池の立場

大正の初年、新現実派として出発した、芥川と菊池は、反自然主義の旗印のもとに、似通った作品を残しています。たとえば、歴史物として、芥川の「羅生門」「地獄変」等、菊池は「忠直卿行状記」等を書き、その内容も、身辺雑記や、作者の心理描写でなく、理知の目で人生をとらえ、観念、テーマを先に立てた小説を書いています。

自然主義と比べても、白樺派や、鷗外、漱石からみても、二人は、殆んど同じ位置をしめています。この二人が、後年、一方は自殺へ、一方は大衆小説へと大きく分かれて行く原因は、何でしょうか。彼等の作品を見て、考えたいと思います。

(二) 『俊寛』を比較する

大正十年十月、菊池寛は、平家物語などから取材した、「俊寛」を発表しました。翌年一月、芥川竜之介は、同じ素材を使って、「俊寛」を発表しています。同じ条件で書いたこの二作を比較検討して、二人の違いを見ます。

菊池の俊寛の大要は、次の通りです。

―鹿ヶ谷の謀が破れて、俊寛、成経、康頼は鬼界が島に流されます。成経、康頼には、赦免の使いが来ますが、俊寛は赦されません。俊寛は、二人を乗せて都へ帰る舟を呼びつゞけ、叫びつかれて、浜辺に昏倒します。やがて気の付いた俊寛は、ひどい飢とかわきを覚え、水をのみ、椰子の実をくらいます。そして、都人の知らぬ、うまさと、よろこびを覚えます。俊寛は、それまでの都風の生活をすて、家を作り、畠を耕し、大魚と格斗し、これをとってくらします。やがて、島人の娘と恋をし、妻として、力強く、幸福な生活をし、有王が尋ねて来ても、島を去ろうとはしません。

一方、芥川の俊寛は、平家を倒すことには全く関心がなく、成経、康頼にとり残されても、平然としています。仏教の悟りの中にくらす彼は、島民の尊敬を集め、机や厨子なども、島民が作ってさしあげます。しかし、はげしく生命力をたぎらせて、生きているのではありません。

この二つの型の俊寛のちがいは、船が去った後の、生活のより所の差に、あらわれています。菊池の俊寛は、生活者として、たくましく生きています。仏道のことなど、忘れています。芥川の俊寛は、生活を、力強く形成

するのではなく、仏教の悟りの中に、周囲のできごとを、その渦の外から、静かにながめています。

芥川が、後に、澄江堂雑記の中に「僕の俊寛も、この点（苦しまざる俊寛を描くこと）では、菊池氏の俊寛の蹤を追ふものである。唯菊池氏の俊寛は、寧ろ外部の生活に安住の因を見生してゐるが、僕のは必ずしもそればかりではない。」と書いています。「そればかりではない。」ことの内容が、仏道のある境地に達していることを指すのは、云うまでもありません。このように、一つの事件に対する二人の解釈は、相当違います。

それでは、こうした二人の解釈の違いのもとは、一体どこにあるのでしょうか。

芥川が俊寛を発表した翌年、大正十二年九月一日、二人は、東京で、関東大震災に遇っています。このときの二人の、文学と生活に対する考えは、相当にちがっています。

菊池寛は「災後雑感」の中で「地震から来るいろ〳〵な実感に打たれたものには、芸術的感興は、容易に湧かないだろう。」「我々文芸家にとって、第一の打撃は、文芸ということが、生死存亡の境に於ては、骨董書画などと同じように、無用の贅沢品であることを、マザマザと知ったことである。」

と述べ、「落ちざるを恥ず」の中に、「自給自足して後、芸術に親しんでも遅くないと思った。」と云っています。文学より、生きるということを大切にしていることが分ります。

これに対して、芥川は「震災の我々作家に与える影響は、さほど根深くはないであろう。すくなくとも、作家の人生観を一変することなどは、ないであろう。」（震災の文芸に与ふる影響）とのべ、又、「妄問妄答」に

客「ぢゃ、芸術は人生にさ程痛切なものぢゃないと云ふのかね……」

主人「莫迦を云ひ給へ。芸術的衝動は無意識の裡にも我々を動かしていると云ったぢゃないか？さうすりゃ芸術は人生の底へ一面深い根を張ってゐるんだ。――と云ふよりも寧ろ人生は芸術の芽に満ちた苗床なんだ。」と云っています。

翻がえって考えてみると、俊寛にあらわれた二人の解釈の差は、そのまゝ、二人の生き方、考え方の差があらわれたものです。

畠を作り、大魚をとり、土人の娘と恋をして子供を作り、たくましく生きた俊寛は、即ち菊池であります。大きな災難の中にも、自分の信ずる道を疑はず、有王に、仏道の教えを説くのは、即ち震災後の芥川であります。二人のなし得る所と、なし得ざる所は、おのずから、俊寛の解釈にあらわれているのです。

㈢ 環境と偶然

こうした二人のちがいは、どこから生じたのでしょう。芥川のことばに、彼の現在を決定しているのは「四分の一は僕の遺伝、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然―僕の責任は四分の一だけだ」（闇中問答）というのがあります。遺伝のことは、別の機会に考えるとして、環境と偶然について、菊池と比較してみます。

芥川の養家は、中流下層階級ではありましたが、彼の学資は、十分に与えられ、一高を経て、優秀な成績で東大に進みました。一高には、菊池寛、久米正雄、松岡　譲、山本有三、土屋文明達がいました。東大卒業直前、第四次新思潮に発表した　「鼻」が漱石に激賞され、文壇に進出、卒業後も、教員をしながら、創作をつゞけ、後に大阪毎日新聞の社友となって、文壇の寵児となりました。

菊池は、高等小学校入学のとき、本をかえ

ず、写本をした程の家に生れ、東京高師に入学して、除籍処分をうけ、一高でも又、退学処分をうけています。そのため、東大に入学できず、友人成瀬の援助で、京大を出て、新聞記者になり、芥川より、二年ほどおくれて文壇に出ています。

つまり、芥川は、生活の苦労なく文壇の頂上へ出たのであり、菊池は、雑草のように、ふみつけられながら、頭をもたげたのです。こうした経歴から、芥川は、本の中に人生を学び、それを美的構成体として、組み上げました。菊池は、力強い生活感から、人間のすなおな実際と、あるべき姿を、かこうとしました。

この違いは、同じ素材を扱っても、作品の内容を別のものにしました。「六の宮の姫君」や「平中」、芥川の「藪の中」菊池の「街道の災難」芥川の「忠義」菊池の「忠直卿行状記」等に、芥川の美、菊池の力、芥川の芸術観、菊池の人生観が、よくみえています。

(四) 転換

大正から、昭和初年にかけて、彼等は、文壇の最も輝かしい作家となりました。だが、大震災後、表面はかわらず活躍する彼等に、転換期がおとずれました。菊池は、真珠夫人を書き、文芸春秋を発行して、純文学から遠ざかり、芥川は、「保吉の手帳から」「お時儀」などの私小説風の作品に筆を染めるようになりました。又、文壇では、プロレタリア文学の勢いが強くなっています。菊池が、大衆小説や出版に転向したのは、後退したというより、生活第一主義の彼が、あるべき所へ行ったと云えます。しかし、芥川の場合は、そうは云えません。芥川の作風転換の原因として、

一、彼自身が云うように、従来の作風に飽きたこと。ある特異な事件に、場所と時間を与えて、作品を作ることが、すでにマンネリズムにおちいり、文章力だけがそれを救っていたのです。

一、新鮮なプロレタリア文学が、彼等の作品を、のりこえていく様に見えたこと。

一、志賀直哉の作品に圧倒され、彼自身が、「密柑」「秋」のようなものを書きたかったこと、等が考えられます。

彼は、「今までの作品より、もっと現実的な作品を書きたかった」のです。

だが、本の中に人生を学び、人生そのものには価値を認めない人間の描く「現実生活」とは何でしょうか。彼は、「一塊の土」「保吉の手帳より」の方向に行こうとして失敗しています。又、当時現実生活に、生れてはじめて、多くの災難がおしよせ、彼の狂気に近い神経は疲れ果てます。そして、当時の傑作といえば、「蜃気楼」「河童」「西方の人」「歯車」「或阿呆の一生」等、病みつかれた精神が、一直線に破滅におもむく、自己の投影図だったのです。昭和二年七月二十四日、彼は自殺しました。

一方菊池は、文芸春秋社々長として、長く活躍します。

芥川の芸術至上主義、菊池の生活第一主義は、こうして、一見同じ文学から出発したようにみえながらも、両極端に転じていったのです。

(本学四年)